

ロンサールとオウイデウス

——『転身物語』受容の一断面——

猪俣賢司

フランス・ルネサンス期、古典文学研究の非常に盛んであった時代に、詩人ロンサールによって次のような一篇のソネットが作られた。

Puisse-je avoir ceste Fère aussi vive

Entre mes bras, qu'elle est vive en mon cueur :

Un seul moment garroit ma langueur,

Et ma douleur feroit aller à rive.

Plus elle court, & plus elle est fuytive,

Par le sentier d'audace, & de rigneur,

Plus je me lasse, & recreu de vigueur,

Je marche apres d'une jambe tardive.

Au moins escoute, & rallente tes paz :

Comme veneur je ne te poursuy pas,

Ou comme archer qui blesse à l'impourveue :

Mais comme amy piteusement touché

Du fer cruel, qu'Amour n'a decoché,

Faisant un trait des beaulx raiz de ta veue.⁽¹⁾

私の心の中で生きてゐる、

あの生きた「猛獣」を、この腕に抱きしめられますように。

そうすれば、たちまちにして私の悩みは癒され、

苦しみは終わりをむかえるだろうに。

彼女が、果敢にも、そしてつれなくも、

小道を走れば走るほど、また逃げれば逃げるほど、

私は疲れ、そして力尽きて、

とぼとぼとした足取りで、後を歩いて行くのです。

せめて聞いておくれ。歩調をゆるめておくれ。

私は、狩人としてでも、また不意に傷を負わせる射手としてでも、
お前を追いかけているのではないのだよ。

そうではなく、恋の神が私に放った残酷な鉄に、
哀れにも当たってしまった恋人としてなのだよ。

恋の神は、お前の眼差しの美しい光線から一本の矢を作ったのだ。

これは、一五五二年の『恋愛詩集』第一二九歌である。後半の二つの三行詩は、オウイティウス『転身物語』を模倣したものとされている。詩人が逃げる恋人の後を追いかけてながら、彼女に呼びかけているその言葉を、ダブネーに向かって発したアポロンの言葉 (*Met.*, I, 504 et suiv.) に倣って表現したのである。この『転身物語』の一部が、ソネットの展開の中でどのように組み込まれたのか、また、その表現がどのように工夫されて用いられているのかを、ルネサンス期に於ける『転身物語』受容の一例として検討してみたい。

まず、詩の前半、第一―二節では、「狩り」のアレゴリーによって、恋する詩人と逃げ去ろうとする女性カサンドルの情景が描かれる。このことは、第一行目で、“Fere”の語によって既に予測される内容である。この“Fere”は、ラテン語や

イタリア語の“fera”を真似て作られた語で、ペトラルカの『カンツォニエーレ』には次のような例が見られる。⁽³⁾

Ahi crudo Amori, ma tu allor più m'informe
A seguir d'una fera che mi strugge
La voce e i passi e l'orme,
E lei non stringi che s'apiatta e fuge.

(*Canz.*, I, 39.42)⁽⁴⁾

ああ、残酷な恋の神よ。そんな時にいっそう、君は僕をせき立てるのだ。

僕の心を苦しめる猛獣の
声と足取りと足跡を追いかけると。

そして、その猛獣は、君に縛られることもなく、身を隠したり逃げたりするのだ。

この「狩り」に見立てられた、上品でしかもつれない女性を追いかける恋のあり方を、ロンサルはペトラルカから学んで、“Fere”という語を借りて表現したのである。そして、“langueur” (v.3), “doulour” (v.4) という恋する男の悩ましき“audace”, “rigneur” (v.6) という小道を逃げて行く女性のかたくなな拒絶反応との対比は、『恋愛詩集』が作られた時代のペトラルキスムの様式美をよく表わしている。

つて「狩」に於ける追跡の場面から第三―四節に自然に移行して『転身物語』の「マピロン」にちかたブネー追跡の場面が繰起されることとなる。マピロンとタブネーの話は『転身物語』第一巻第四五二行から始まるが、マピロンが彼女に呼びかける第五〇四行から引用してみよう。

“Nympha, precor, Penei, mane; non insequor hostis;

Nympha, mane. Sic agna lupum, sic cerva leonem,

Sic aquilam penna fugiunt trepidante columbae,

Hostes quaeque suos; amor est mihi causa sequendi.

Me miserum! ne prona cadas indignave laedi

Crura notent sentes et sim tibi causa doloris.

Aspera, qua properas, loca sunt; moderatius, oro,

Curre fugamque inhibe; moderatius insequar ipse.

……

Certa quidem nostra est, nostra tamen una sagitta

Certior, in vacuo quae vulnera pectore fecit.

……”

……

Ut canis in vacuo leporem cum Gallicus arvo

Vidit et hic praedam pedibus petit, ille salutem;

Alter inhaesuro similis iam iamque tenere

Sperat et extento stringit vestigia rostro;

Alter in ambiguo est an sit comprehensus et ipsis

Morsibus eripitur tangentiisque ora relinquit;

Sic deus et virgo est, hic spe celer, illa timore.

Qui tamen insequitur, pennis adiutus Amoris,

Ocius est requiemque negat tergoque fugacis

Imminet et crinem sparsum cervicibus afflat.

(Met., I, 504-511, 519-520, 533-542)

「ニンフよ、シーネイオスの娘よ、お願ひだから待つてくれ。私は敵として追いかけてくるのではないのだ。」

ニンフよ、待つてくれ。雌の小羊が狼から、雌鹿が獅子から、鳩たちが羽をふるわせて鷲から逃げるときに、

それぞれ自分の敵から逃げるものだ。しかし、私が追いかけているのは恋のためなのだ。

私は何て哀れなのか。お前がつんのめってころばないように。また、無垢な脚が茨の刺で傷つかないように。

そして、私のせいでお前が苦しみませんように。お前が急いでいるその土地はでこぼこだ。頼むからもっと慎重に

走ってくれ、そんなに急がないでくれ。私自身ももっと慎重に追いかけてよう。

……

私の矢はとても確實だが、私のよりもっと確實な一本の矢が、

心静かなこの胸に傷を与えてしまったのだ。

……」

……

ガリアの犬が広い牧場で兎を見つけた。

その時、犬は足で獲物をつかまえようと、兎は身の安全を守るうとする。

一方は、既にかまえたも同然で、すぐ捕えるだろうと期待し、鼻面をのぼして相手の足に触れる。

他方は、自分がつかまったかどうかわからずに、

相手の牙から逃れ、触れる口から離れようとする。

ちょうどそのように、神と乙女は、神は希望のため、乙女

は恐怖のために、急いで走っている。

しかし、神の方は、恋の神の翼に助けられて追いかけて、

より速く、相手を休ませず、逃げてゆく乙女の後ろに迫り、

そして、頸筋に散らされたその髪に息を吹きかけるのだ。

オウイディウス話の中でも、ガリアの犬と兎の譬によって、アポロンとダプネーの恋に「狩り」のイメージが与えられている。ロンサルが自分の詩の第一行目を書き始めた時、既にこの『転身物語』の場面が脳裡にあったと考えることも

不可能ではあるまい。しかし、ロンサールの詩の第七十八行目、「私は疲れ、そして力尽きて、とぼとぼとした足取りで、後を歩いて行くのです。」という表現と、オウイディウスの詩に見られる、ガリアの犬のように女性を追いかけるアポロンの力強さとを較べてみる時、二人の詩人が描く恋にはそれぞれ別の性格があることがわかる。また、ロンサールの詩では、詩人とその恋人カサンドルとの関係が "langueur", "douleur" と "audace", "rigueur" の語によって対照的に示されていることを先に述べたが、オウイディウスに於けるアポロンとダプネーとの関係は、"hic spe" と "illa timore" (v. 539) の対比に見られるように、恋愛の場で分担する男女それぞれの役割、力関係というものが、ロンサールの場合とは逆のものになっている。ソネットの第一行目から『転身物語』の文学的レミニセンスがあったと考えるなら、オウイディウスの古代的、異教的な自由奔放な恋の様相が、キリスト教風のペトラルキスムに依拠して改作されたと言うべきであろう。オウイディウスやまたカトゥッルスに見られる恋の情景をロンサルに期待するには、三年後の『続恋愛詩集』とそれに続く『新続恋愛詩集』を待たなくてはならないのである。

『転身物語』の模倣は、ソネットの第九行目から始まると考える方が恐らく正確であろう。第八行目までは、恋の追跡という主題的な共通性は持つものの、その表現や趣の点では

アポロンとダブネーの話とは異質のものである。第九行目以下、細かな点については措くとして、詩人のカサンドルに對する呼びかけを、ダブネーに對するアポロンの呼びかけに見立てたものと考えられる。しかし、看過できないことが一つある。それは、最終行の表現である。“Faisant un trait des beaux raiz de ta veue.”という表現はどこから来たのか。アポロンの受けた矢は金で作られているというところは『転身物語』で語られている(*Met.*, I, 470)が、「お前の眼差しの美しい光線」から作られているというきれいな一句はオウィディウスのものではない。⁽⁹⁾

E da' begli occhi mosse il freddo ghiaccio
Che mi passò nel core

(*Canz.*, LIX, 6-7)

そして、美しい眼からは冷たい氷が放たれ、
それが私の心をつらぬいた。

Dal bel seren de le tranquille ciglia
Sfavillan sí le mie due stelle fide,

(*Canz.*, CLX, 5-6)

美しく澄んだ安らかな両の瞳に、
私の誠実な二つの星がこんなにも輝いている。

E que' belli occhi che i cor fanno smalti,
Possenti a rischiarar abisso e notti

(*Canz.*, CCXIII, 9-10)

そして、人の心を石と化し、
深淵と暗闇を照らす力を持っているあの美しい眼。

これらペトラルカの『カンツォニエーレ』に例を見るように、ロンサールの詩の最終行は、女性の眼差しを歌うペトラルキスムの流れに位置する表現様式であると考えられる。これは、『恋愛詩集』の随所に見られるものであり、女性の清らかな神聖さを示すものとなっている。想起される野性的で荒々しいオウィディウスのダブネー追跡のイメージを、そして、それが当時の人々の持つ『転身物語』に對する文学的教養に触れた時にカサンドルに重ねられるかもしれない古代的な淫乱さを、気高く清らかな趣で包み込むために、最後の一行はどうしても必要な工夫であったのではないだろうか。

以上、ロンサールのソネットを一篇例に取り上げて、『転身物語』受容の一端を考察してみた。オウィディウスに對する教養が十分にあったはずのルネサンス期に於いて、ペトラルカを模倣することを主眼として作られた『恋愛詩集』では、以上見てきたオウィディウス模倣のあり方が、ロンサールに

として最大限のものであったと言えるかもしれない。これが、当時支配的だったペトラルキスムの中で垣間見られる『転身物語』の姿なのである。

註

- (一) Pierre de Ronsard, *Œuvres complètes*, t. IV, édition critique préparée par Paul Laumonier, troisième tirage revu et augmenté par Raymond Lebègue, Paris, Nizet (S.T.F.M.), 1982, pp.125-126. *Les Amours*(1552), CXXIX.
- (二) *Ibid.*, p.126, note 1; Marc-Antoine de Muret, *Commentaires au Premier Livre des Amours de Ronsard*, publiés par Jacques Chomarat, Marie-Madeleine Fragnard et Gisèle Mathieu-Castellani, Genève, Droz ('Travaux d'Humanisme et Renaissance'), 1985, p. 85.
- (三) Ronsard, *op. cit.*, p.125, note 6, et p. 89, note 2.
- (四) Francesco Petrarca, *Le Rime*, a cura di Giosuè Carducci e Severino Ferrari, nuova presentazione di Gianfranco Contini, Firenze, Sansoni (Nuova Carducciana), 1984.
- (五) Ovide, *Les Métamorphoses*, t. I, texte établi et traduit par Georges Lafaye, Paris, Les Belles Lettres (Collection des Universités de France), 1961.
- (六) "... Videt igne micantes/Sideribus similes oculos,..." (*Met.*, I, 498-499) (西のよみはひたぎど輝へ星や眼のるゝ) ㄥㄣㄣ

表現が類似のものとして挙げられるかもしれない。しかし、これがロンサールの詩に影響したと考えるのは難しいように思われる。